

お彼岸の法話

日本では、今丁度、秋のお彼岸ですね。皆様と、お彼岸について語りあいたいのでありますが、代わりにこの文章を書いてみたいと存じます。

さて、「彼岸」と申しますのは、文字通り、彼(か)の岸ということでありまして、つまり、あちら側の岸のことではありますが、それは悟りの世界、お浄土の世界を意味しています。彼の岸があれば、こちら側の岸、つまり此岸(しがん)があります。この此岸は私どもが現実には生きているこの世界のことです。つまり、自分の思い通りになることもあるでしょうが、なかなか自分の思い通りに行かず、迷い、苦しみ、悩み、不安を感じつつ日々過ごしているこの現実世界のことです。

したがって、この此岸のことを「娑婆(しゃば)」と呼んだりします。この「娑婆」とは元々インドの言葉の **saha** を漢字で表わしたのですが、その意味は「堪忍土(かんにんど)」つまり、いろんな苦しみに堪え忍んでいかねばならないところということです。私どもは、人間としてこの世に生まれ出てきた以上、様々な人間苦をなめざるを得ないですね。その人間苦を仏教では「四苦八苦(しくはっく)」と呼んでいます。

その「四苦八苦」といいますのは、生・老・病・死の四苦に、愛別離苦(あいべつりく)、怨憎会苦(おんぞうえく)、求不得苦(ぐふとっく)、五陰盛苦(ごおんじょうく)の四苦を加えて八苦と呼んでいるのであります。

生老病死の四苦、つまり生まれてきて様々な苦しみを体験し、心身が衰え老いていくことに苦しみ、病気に苦しみ、そして生きていきたいのに必ず死んでいかねばならぬ苦しみが、常に私どもに横たわっています。

そして、その生きている間に、愛する人と死に別れ、生き別れせねばならない苦しみ、つまり愛別離苦に泣いたり、反対に、嫌な人、気の合わない人、自分をいじめると一緒に暮らしていかねばならない、一緒に働いていかねばならないといった、人間関係がうまくいかずに苦しむこと(怨憎会苦)が多いですね。また、自分の欲しいもの、求めているものや境遇がなかなか自分のものにならず、反対に、求めているまさかのことに遭遇したり、避けたいこと、出会って欲しくない悲惨な境遇になって大変苦しむことがあります。これを求めて得ざる苦しみ(求不得苦)と申します。また、求めているもの(財産、名誉、地位、健康、異性等々)がたとえ得られたとしても、なかなか満足できずに、かえってもっともっと自分の欲望に振り回されて余計に苦しむ場合がでてきます。これを五陰盛苦といいます。

かくして、生きている以上、私ども人間は一人残らず様々な苦しみをなめざるを得ないようになっているのであります。それを、お釈迦様は「人生は苦なり」と語られました。ですから、私ども一人ひとりの課題は、否が応でも遭遇せざるを得ない様々な苦しみから、解放されるところの境地を開発し、自分のものに是非すべきであると思うのであります。そのあらゆる人生苦からの解脱(げだつ)と申しますか、解き放たれた心の状態、心境を間違いなく獲得すること、それを彼岸に到る、浄土に往生すると言うのであると思います。

ですから、彼岸、お浄土といいますのは、苦しみが無い何か空間的に遠い理想の境地のように思ってしまった、そこに死んでから生まれさせてもらうというふうに私どもは考えることがあるかもしれませんが、もっとつきつめて自分の現在の苦しみに向き合いますと、死んでからそういう苦しみのない極楽世界に生まれるということでは頼りなく感ぜられませんでしょうか。

したがいまして、私どもが現在ただいま生きているこの娑婆世界において、いろいろ自分の煩惱に煩わされて、大いに迷い悩み苦しみますが、そこから逃避したり、自殺したり、死んでから救いがあると考えたりせずに、いまここにおりながら、また煩惱を抱えながら、心一つが安心できる境地、苦しい娑婆におりながら、心一つが転じられる境地、言いかえますと、心の力の所有者にならしてもらい、是非そうになってくれ、そういう人間になることが人間として最上な生き様だよ、と四六時中、願いはたらいてくださっているのが仏というものではなかろうかと、私は日々思っています。

その、何としてでも、苦しんでいる汝を間違いなく救って、今この生きている間に、安心の境地を間違いなく得させたいという、大きな大きな仏様の願い、はたらき、大慈悲心が、様々な経典になり、説法になり、仏像になり、そして「南無阿弥陀仏」という仏様のお名前になっているのであります。

大無量寿経というお経に、「触光柔軟の願」というのがありまして、仏の教説を聞いてその光明に触れた者、つまり仏様の広大な願い、智慧、慈悲に触れたものは、必ず身心柔軟になるぞと誓われています。この現実世界では、否が応でも迷い、悩み、苦しみますが、その真っ只中において、身も心も軟らかく、平和な安心の心に転ずることが出来るということではなかろうかと思えます。

そういうことを願われているのが、私ども人間なのですね。どうかどうか自他ともに、この彼岸会の間だけではなく、常に常に、仏様の願いに耳を傾けて、自分自身が間違いなく、この世に生を受けて本当に有難いと心の底からうなずける人間にならなくてはならないと思えます。彼岸というはどこか遠くにある世界ではなく、広大無限なるいのちの世界、自他の分別・差別を越えた、私どもが現によって立っている一如平等なる真実の世界であると思えます。合掌
(ご質問・ご意見・ご感想をどうぞ。 mikinakura87@gmail.com まで。)